

里づくり

人に学び、地域に学び、今できることから始める

CONTENTS

- 地域づくりリレーインタビュー ①
NPO法人 八剣山エコケータリング
代表 ビアンカ・フルストさん
- 地域づくりリレーインタビュー ②
余市町漁港ガイド 吉田 真也 さん
- トピックス



地域づくりリレーインタビュー①

NPO法人 八剣山エコケータリング

代表 ビアンカ・フルストさん

1966年生まれ、ドイツ出身。札幌市南区砥山地区にある八剣山果樹園をベースにして、ドイツスタイルの環境教育活動を行っている。

札幌市環境保全アドバイザー、北海道地域環境学習講座トレーナー、酪農学園大学非常勤講師（環境教育論）。2016年2月、第7回さっぽろ環境賞「環境保全創造部門 札幌市長賞」を受賞。



ビアンカ・フルストさん

●日本に来たきっかけは？

学生の時、留学で日本に初めて来ました。その後、1996年から国際交流員として札幌で3年間働くこ

とになりました。国際交流員として

は、姉妹都市との交流のサポートや

海外に行きたい人へのアドバイス、

札幌市民にドイツの文化を紹介する

展示会・講演会などイベントの企画

などの仕事をしていました。

当時はまだ、日本から見たドイツ

と言えばビールやソーセージ、ドイツから見た日本は、侍や芸者、満員電車といったステレオタイプなイメージを中心にしたお互いの見方が多かった。そういった状況を乗り越えるための架け橋になることが、自分の役割だと思い、お互いの国に共通する環境問題などを織り交ぜながらドイツを紹介していました。

●日本人は「やった方が良いんだろ

うな」と思いながらも、自分ではなかなか行動できないところがあります。

仰るとおり、当時からほとんど変わっていないこともあると思います。

NPO法人八剣山エコケータリング（以下、エコケータリング）では、

いつ頃から、どのような取組をされているのですか？

NPO法人化したのは8年前ですが、それ以前から市民団体として活動はしていました。ここでは、ドイツのESD教育をもとにした体験メニューを中心にした様々なプログラムを提供しています。幼稚園の授業から

大学生や社員研修のワークショップなど色々な年代の方が、体験に来てくださっています。

一般的な知識をインプットするだけの教育だと、理解は出来てもなかなか行動に移せないものです。「おかしを食べ過ぎると身体に良くないと分かっているけど食べてしまう」、「エコが良いことだと分かっているし、

賛成はするけど具体的な行動に移せない」というように。ESD教育のような頭・心・手を全て動かすアクティブラーニングのようなタイプの教育だと、自分で行動に移したくなります。



エコクラフト体験の様子。

ももとの環境教育は、「ゴミの処理が大変で：」「石油は数十年後にはなくなつて：」「オゾン層が破壊されていて：」といった問題を教えるば

かりの教育でした。しかし、このよ
うな話をしてしまうと、「自分の力で
は何にも出来ないんじゃないか」と
なって、絶望するし、問題から逃げ
たくなってしまいます。一方、ES
D教育では、「こうすれば皆で良い形
の社会を作れるんだよ」と行動まで
導くことが狙いになっているので、
自分で考えさせたり、計画させたり、
色々と体験をさせたりすること、
「自分ができるようにしたい」「皆
で協力して解決したい」と参加者が
前向きな気持ちで取り組むように導
きます。課題解決に失敗することも
ありますが、失敗から学ぶことも
色々ありますし、それはそれでOK
という考え方で。



エコクラフト体験で作った木ん(金)メダル。

●ドイツでは前向きにエコを学べる
ようになってきているんですね。日本では、
エコに対して「節約」「我慢」「不便」と
いった後ろ向きなイメージも
ありますが。

エコは、「賢く使う」という意味では、
「節約」であることに間違いはあり
りません。「賢く使う」というのがポ
イントで、例えば、ドイツの新築の
家はしっかりと断熱していて、3重窓
が当たり前です。そうすることで、
少しの暖房で快適に過ごせるからで
す。つまり、「快適に過ごしたいけど、
そのためのエネルギーは賢く使いま
しょう」というのがドイツの考え方
です。エコという大義名分のもと、
「エネルギーを節約するために、生
活の快適レベルが下がっても我慢し
ましょう」となってしまうと、エコ
が嫌になってしまうかもしれないで
すね。

●「どういう考え方でエコに取り組
むか」が大事なんですね。
エコケータリングでは、どのよう
な体験メニューを提供しているの
ですか？

ESD教育をもとにした体験メニ
ューはいくつかありますが、その中
の1つにソーラーッキングという、
太陽熱だけでポップコーンやジャム
を作る体験があります。



ソーラークッカーの説明をしにくださるピアンカさん。



ソーラークッカーを使用した体験。

このソーラークッカーというシン
ブルな装置で、ガスも電気も使わず
に鍋の温度を300度まで上げられ
るのですが、口頭で説明するだけで
はピンときません。実際に使って、
ジャムを煮込んで甘い香りを感じた
り、器具や鍋の熱さを体感したりす
ることで、初めて理解できるのです。
これが理解できると、ソーラーコレ
クターの仕組みや、ソーラーコレク
ターで農園のレストランの皿洗いで
使うお湯をまかなっていることを話
しても理解できるようになるし、「あ
んな感じで出来るんだったら、ちょ
っとやってみよう」という人が出て
きます。



八剣山果樹園に設置されているソーラーコレクター。

もちろん私たちは、「札幌の人たちが、毎日ソーラークッカーを使って料理をすれば、省エネになるんだ」なんてことを言っている訳ではありません。ソーラークッカーを使って太陽熱のポテンシャルを体験するだけで、十分に自然エネルギーの勉強になりますし、「木の枝を拾って料理に使用する国に、このツールを持つて行けば、森の破壊とか砂漠化もなくなるし、枝拾いをしていた子供や女性は、枝拾いをしていた時間を通学などに充てることが出来るようになる」と森の保護とSDGsに結びつけて話をすることもできます。遊びのように見えるジャム作りで、学校での授業では得られないような、「気づき」や「心の響き」、「スキル」が身につきます。

●素敵な活動なので、未永く続けていただきたいです。

来てくれた人の「楽しかった」といったフィードバックや有意義な活動が出来ているという充足感が得られるので今後も続けていければ良いですね。私にできる社会貢献はこれだと思っていますし、地域の観光資

源・ツーリズムの小さな魅力の一つとしてやれればと思います。



マスコットキャラクターの「エネガエル」。ピアンカさんのお子さんがデザインされたそうです。

●この地域の果樹園の皆さんでガイドを育成して、観光客を案内するよいうな取組も始められていますし、そういう人たちを含め地域が一体となって進められると良いですね。この地域に來た当初と比べて、地域は変わりましたか？

1999年に八劍山トンネルが完成して交通量が増えて、そのことがマイナスになるかと思いましたが、人が来てくれることで地域が生き生きしてきました。地域の活性化のために活動する「八劍山発見隊(※)」

だったり、福島の子供たちの保養所「かおりの郷」だったり、石窯で焼いたパンを販売する「あゆんぐ」だったり、八劍山ワイナリーだったり…この場所が好きで、この地域をもっと盛り上げたい人やこの地域が好きで飛び込んで来てくれる人が増えて、トレイルランや音楽フェスのようなイベントも増えてきました。地域活動が活発になり、色々な人たちが夢を形にしている地域になってきていると思います。

●ピアンカさん、ありがとうございます。



取材時期は晩秋でこの様子でしたが、夏には青々とした美しい八劍山を望めます。

※ 里づくり第3号(2012年1月発行)の「地域づくりリレーインタビュー」で、当時、「砥山ふれあい果樹園」を運営されていた瀬戸修一さんと「塚本まちむら計画研究室」を主催していた塚本保弘さんから、「八劍山発見隊」や札幌

市南区砥山地区の果樹生産者の取組について、お話を伺っています。

瀬戸さんが、関東からUターンで戻ってきた時、砥山地区はどういう状況だったのか？砥山地区を活性化させるためにどのような活動を進めたのか？

気になる方は、是非、「一」読んで下さい。

【URL】

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/ski2_kannri/furumizu/s_hidouindayori.htm

北海道山地区ふるさと、大正土佐文化復興財団(北海道山地区ふるさとアドバイザー)編纂

第3号 2012年1月
編集：中野 隆雄(北海道山地区ふるさとアドバイザー) 監修：中野 隆雄(北海道山地区ふるさとアドバイザー) 発行：中野 隆雄(北海道山地区ふるさとアドバイザー)

CONTENTS

- 地域づくりインタビュー
- 塚本保弘さん(計画研究室) 塚本 保弘、高ノ原山内 隆雄(果樹園) 瀬戸 修一 氏「都市住民との協働による農村地域の魅力発信」
- 北海道山地区ふるさとアドバイザーレポート 田嶋 洋山 氏「「発電型遊園地」を創りだす」
- 特集 株式会社の上野 代表取締役 長谷 結美氏
- BOOKS 田嶋 隆雄「～行旅に感づいて(むす) 対こし」
- トピックス

一人に学び、地域に学び、いかにできることから始める。

新任指導員紹介

洞爺湖町 青山 伸子 さん



胆振管内洞爺湖町で水稲・高級菜豆・野菜・果樹を夫、息子夫婦と共に営む傍ら、現在はJA北海道女性協議会会長を務め、食育や生産者と消費者との交流、男女共同参加君の活動をしております。また、自家生産物の加工・販売をしております。指導員就任を機会に、他地域の皆様方との交流と活動を通して学んでいきたいと思えます。よろしくお願いたします。

表紙紹介



今回は、余市町のリンゴのモニュメントが表紙です。今号の地域づくりリレーインタビュー②で登場する吉田真也さんの「余市漁港を散策しよう」という体験プログラムを提供している余市観光協会から画像をいただきました。

余市町のシンボル「シリバ岬」と余市湾を背景にしたリンゴのモニュメント。これは明治初期に北海道に西洋りんごなどの果樹を輸入して栽培を指導したルイス・ベーマーを顕彰したモニュメントです。

余市町では、ベーマーの指導を受けた金子安蔵が、リンゴの初なりを成功させ、「余市りんご」は全国に名を馳せ、今日に及んでいます。

あの人たち、活動をすごく頑張っているから応援したい！
行政から支援を受けられるようなものはないかな…？
地域にそんな方がいらっしやったら、是非ふる水事業をおすすめしてください！
事業が気になる方、やってみたい方がいらっしやれば、担当者が御説明に伺います！



ふる水事業について、詳しく知りたい方は、こちらのQRコードからリーフレット・ホームページをご覧ください。



ふる水パンフレット



ふる水ホームページ

食べて、泊まって、体験して…
そこにしかない魅力を活かし、地域が一丸となって
観光客を受け入れる農村ツーリズムを
“農たび・北海道”の愛称で道は応援しています。

「農たび・北海道」公式 Twitter
フォローをお願いします！

農山漁村で食べた、見つけた、体験したことを、左下のような#(ハッシュタグ)をつけて投稿してください！「いいね」や「リツイート」で、皆さんの情報発信と農山漁村を応援します！



#農村ツーリズム
#農たび

@notabi_hokkaido

Facebookでも
引き続き情報発信中！！
「いいね！」を
お願いします



農たび北海道 Facebook

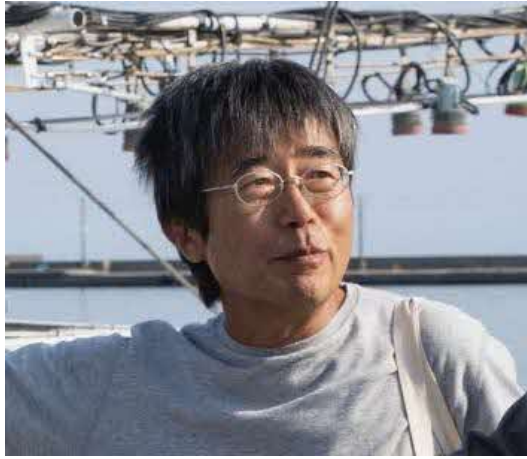
地域づくりリレーインタビュー②

余市町漁港ガイド

吉田 眞也 さん

1954年生まれ、神奈川県出身。元水産普及指導員であり、道内の水産普及や青年海外協力隊、JICAの技術専門家として40年ほどの勤務。定年後、余市町に居を構え、現在は漁港ガイドとして活動している。

水産普及指導員時代には、後志管内では10年間に渡り、小樽市・古平町・岩内町ではソイヤヒラメ、ホッケ、余市町・寿都町・神恵内村ではウニやアワビ、昆布の増殖技術試験や資源管理、磯焼け対策を担当。磯焼け対策では、日々海に潜って、調査を行っていた。



吉田 眞也さん

産物や競りを見たり、加工現場を視察したりするなど、漁港や漁協、市場、燻製工場を中心に興味がある方には余市水産博物館、道総研の中央水産試験場、旧余市福原漁場、旧下ヨイチ運上屋、地元の蒲鉾店などを案内していきます。海の上での漁獲風景は見ることは出来ませんが、漁港では色々な漁船や漁具など漁業者の知恵と暮らしが詰まった景色を見ることが出来ますし、漁船の音、浜の風、波の音、潮の香りなどを五感で感じることが出来ます。

●漁港ガイドでは、どのようなことをやっているのですか？

余市漁港をゲストとブラ歩きして漁港施設や漁具、漁船などの説明をしたり、市場で水揚げされたばかりの水

●漁港ガイドを始められたきっかけはなんですか？

以前から一次産業と一般の人を結びつけるインタープリター(訳:通訳、

仲介者、解説者)が必要じゃないかと思っていました。もちろん、本当は農業者や漁業者が、一般の方にガイドをして、農業者や漁業者の収入になるというのが一番なんですけど、家業があるからガイドの受入れをやっている暇がないという人が多い。それに話をするのが好きな人もいるけど、そうでない人もいるし、深い知識を持っているけど、広く知識をもっているとは限らない。そういう意味で、農業者・漁業者と一般の人の間に入って、自然だとか一次産業について、話ができる人が必要かもしれないなど。



漁港をブラ歩きしながらガイドをします。



スケッチブックを使って分かりやすく説明します。

特に漁業の場合は、船に乗って海の沖へ向かい、見えない海中で漁を行うから、畑で農作業や収穫作業が見られる農業よりも見る機会が少ない。普段なかなか見ることができない漁業や漁業者の暮らしについて、一般の人にも伝えるべきことがあるのではと思っていました。特に都市部では、魚は切り身でしか見る機会がないなんて話も聞きますし。

そういう思いを持って、余市観光協会に足を踏み込んだところ、水産業に関する体験プログラム作りを始めると聞いて、そのワークショップに参加することになり、結果、漁港ガイドとして体験メニューの1つをお手伝いさせていただくことになりました。



時には、実際に漁具を触ってもらいます。

●一般の人に漁業者の思いを伝える仲介者ということですね？

そうですね。活動のコンセプトとしては、「Support Local Fisherman（沿岸漁業者のサポート）」を掲げていまして、沿岸漁業者のサポーターとして、「獲る・作る・食べる」だけの観光体験だけではなく、余市町の漁業者の歴史と暮らしをストーリーにして、一般の人に伝えられればと。余市町に住んで、魚を獲って、家族を養い、生活している人がいることを知った上で、おいしく魚を味わってもらいたいです。「ただ旨

い旨いと魚を食べているんじゃないからねえよお〜」って（笑）

「観光」は「地域の光を観る」と書きますが、余市町の漁港と漁業に光を当てさせていただいて、一般の人に観てもらおう機会を作ればと思っております。



タイミングが合えば、せり人から話を聞くことも。

●漁港ガイドをやる上で、気をつけていることはありますか？

当たり前ですが、漁協や市場に顔を出したり、漁業者とのコミュニケーションは意識して取るようにしています。スケジュールが決まれば、「明日、この人数が何時頃見に来るのでよろしくお願いします」と挨拶に回ったり。また、漁業者の仕事場に足を踏み入

れているという意識を持ちながら、迷惑にならないように気をつけています。

●漁港ガイドのやりがいはどういったところですか？

余市町の漁業者が暮らす日常の風景、これが何よりも素晴らしい！そんな素晴らしい漁業者の暮らしと知恵を紹介することで、漁業者とゲストを繋げることができたかなと思えた時が1番嬉しいですね。

●漁港ガイドの活動の中で課題はありますか？

「Support Local Fisherman」と言っているものの、道はなかなか険しくて。先ほどの見る機会が少ないという話とも繋がっているんですが、農業では生産者のこだわりや畑の風景など、そういった背景（イメージ）を含めて野菜を販売するようになってきているが、水産業はそういう事例はまだ少なく、そこにある文化や生活、海などの背景を販売に生かすまでに至っていないことですね。自分もその点を解決するために活動をしています。自分の他にも北海

道漁業士だとか、活動に理解のある人が出てきてくれたら良いですね。



漁業者と交流ができることもあります。

●今後の目標は何ですか？

漁業者の皆さんは家業で忙しい。私がインタープリターとして、余市町の漁業者の日常にちょこつとお邪魔しながら、ブラ歩きをしにきたゲストに楽しんでもらって、1人でも多くの人に余市町の漁業者の応援団になってもらえれば、最高ですね！
また、これからは豊かな海には欠かせない、大事な川と里山の話もしていきたいと考えています。

●吉田さん、ありがとうございました。

「わが村は美しくー

北海道」運動 第10回コンクール

第9回コンクール大賞受賞 非特定営利活動法人サトニクラス



応募団体募集




第9回コンクール大賞受賞 北海道真狩高等学校



応募締切

令和3年6月30日

1. 目的 このコンクールは、自然的・社会的・歴史的に特徴のある景観を形成してきた北海道の農山漁村がより「美しく」あるため、地域の魅力と活力を高めようとする住民主体の活動を見出し、これを広く発信し、波及させていくことによって、農山漁村の振興に寄与することを目指します。
2. 応募対象 北海道の農山漁村において、農林水産業の生産活動との関わりがあり、地域住民が主体となって地域づくりに取り組む活動を対象とします。
3. 応募用紙 北海道開発局のホームページから入手できます。また、各開発建設部でも配布しております。
https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ns/nou_sin/ud49g7000000emhm.html こちらからも御覧いただけます→ 
4. 応募方法 上記により入手した応募用紙に御記入（御入力）の上、下記①または②の方法から御応募ください。
① 下記アドレスに応募用紙を添付し御応募ください。
hkd-ky-wagamura.u@gxb.mlit.go.jp
② 活動団体の所在地を管轄する各開発建設部に送付又は持参にて御応募ください。
5. 応募期間 令和2年12月21日（月）から令和3年6月30日（水）まで
6. 賞について ■優秀賞 応募していただいた団体の中から優秀な活動を選考します。
■奨励賞 将来性や継続性から奨励する活動を選考します。
■大賞 全道の優秀賞の中から先導性、モデル性の高い活動を選考します。
7. 受賞団体の発表 「優秀賞」・「奨励賞」については令和4年1月頃、「大賞」については令和4年10月頃に発表します。
※応募に関する詳細につきましては、以下の北海道開発局ホームページを御覧ください。

【主催】北海道開発局

【共催】北海道、NPO法人わが村は美しくー北海道ネットワーク

【後援】北海道総合通信局、北海道財務局、北海道農政事務所、北海道森林管理局、北海道経済産業局、北海道運輸局、北海道市長会、北海道町村会、北海道土地改良事業団体連合会、北海道農業協同組合中央会、北海道漁業協同組合連合会、北海道森林組合連合会、北海道経済連合会、北海道商工会連合会、北海道日本型直接支払推進協議会、北海道漁港漁場協会、北海道木材産業協同連合会、(公財)北海道地域活動振興協会、(公社)北海道観光振興機構、(公社)北海道栽培漁業振興公社、(一財)都市農山漁村交流活性化機構、(一財)北海道農業企業化研究所、(一社)北海道商工会議所連合会、(一社)北海道消費者協会、(一社)北海道土地改良設計技術協会、(一社)シーニックバイウェイ支援センター、(一社)日本コミュニティ放送協会北海道地区協議会、NPO法人「日本で最も美しい村」連合、オーライ!ニッポン会議、学校法人北海道科学大学、北海道旅客鉄道(株)、(株)北洋銀行、(株)AIRDO、(株)リクルート北海道じゃらん、生活協同組合コープさっぽろ、朝日新聞北海道支社、毎日新聞北海道支社、読売新聞北海道支社、北海道新聞社、十勝毎日新聞社、日本農業新聞北海道支所、NHK札幌放送局、HBC北海道放送、STV札幌テレビ放送、HTB北海道テレビ放送、UHB北海道文化放送、TVHテレビ北海道

『わが村は美しくー北海道』フェイスブック みんなのページ
<https://www.facebook.com/wagamura>

こちらからも御覧いただけます→



あしたを創る 北の知恵

北海道開発局

■お問い合わせ先

北海道開発局農業水産部農業振興課
〒060-8511 札幌市北区北8条西2丁目 札幌第1合同庁舎
TEL 011-700-6768 FAX 011-709-2145
E-mail hkd-ky-wagamura.u@gxb.mlit.go.jp